

二〇一八年一二月度 聖書研究発表

『真の仲保者』出エジプト記三二章

池谷正基

はじめに

杉並教会では、毎週水曜日の午前中に聖研祈り会が開かれています。毎月第二水曜日は、輪番で参加者が聖書研究の発表を行い、その他の水曜日では情報共有と課題に沿った祈りの時間を与えられています。

私自身といたしましては、四年間で三回の発表の機会を頂きました。初めての発表は出エジプト記九章一―一章、二回目の発表は同じく出エジプト記三二章、三回目が出エジプト記一章でした。この間、私は小さい者ながら多くを学び、本当に充実した教会生活を過ごすことができました。私のような日曜日に仕事をしている人間にとっては、平日に行われる聖書研究祈り会が信仰の命綱になっていると言っても過

言ではないと思っています。研究発表を通じて、この喜びと感謝の気持ちを少しでも皆様と共有できたら幸いです。以下の文章は、橄欖掲載用に編集したものです。掲載にあたりまして文章添削を頂きました中島伸一長老をはじめ、注解書を譲って頂きました平田卓夫長老や聖研祈り会で日頃お世話になっている皆様にお礼申し上げます。なお、聖書本文に関しましては、是非、お手持ちの聖書を開いて頂ければ幸いです。

#### 偶像製作 一―三節

ここでの民の罪は実に人間らしいと思います。人には神様の計画と実行を待ちきれず自ら手を下さることがあります。イスラエルの民は四〇日という時間との戦いに大敗したと言えます。時間は味方につけば信仰を強めるのに役立ちますが、敵にすれば信仰を揺るがす働きも大いにあるのです。それはちょうど、サウルがサムエルの到着を待ちきれず儀式を行ってしまったこと(サムエル一、一三章八―九節)

やサラがアブラハムにハガルを与えてイシユマエルを得た時のようにです。私たちの日常も『時間』と密接につながっています。この場合、時間というより『間』と表現した方がより適切かもしれません。私たちの信仰は実に間に弱いものだと思います。たとえば、聖日に心を満たされても、その充実が一週間と持たないことがあります。あるいは仕事、子育て、その他あらゆる人生設計において、わたしたちは導きを待ちきれず早計に判断してしまうことがあります。自らを疑い、神様を信頼し、委ね、祈りながら待ち望むことができる信徒になりたいと思います。

さて、一節で早くも疑問がでてきました。それは、『民たちはいったい何者を求めたのか?』というところで、この後にアロンが言う『主への祭りである』を含め、三二章全体を通じて深く関わってくる事柄であり、この一節を学ぶことに時間の大半を要してしまいました。とはいえ、逆にこの箇所が見えてくると、その後は比較的スムーズに学ぶことができました。

おそらくこの箇所は、章全体を通じた学びの鍵だったのだと感じています。

民たちは一節で『先だつて行く神々』を偶像として求めたわけですが、具体的にはどういうつもりで、どんなものを望んだのでしょうか。これについては以下三つの候補があると思います。

- 一、ヤハウエなる神の、目に見える象徴を求めた。
- 二、ヤハウエなる神に付け加え(混合、混同する)る神を求めた。
- 三、ヤハウエなる神から別の神(偶像神)に差し替えを求めた。

ティンデル聖書注解(㊦・アラン・コール)をはじめ、多くの注解書ではエロヒーム(ἑロῖμ 神々)は通常、威厳の複数形として扱われるもので、付け加えられる動詞は単数形を用います。しかしここでの『先だつて行く』は複数形の動詞であるため、三位一体のヤハウエを指すものではなく、多神教(エジプト文化や

バアル教の影響) 的なものであると説明しています。そのとおりに考えるのであれば上記候補の中から最も有力なのは三ですが、この点において現代聖書注解(ゴ・ヨフレットハイム)では違った解釈でした。現代聖書注解曰く、『先だつて行く』(𐤂𐤏𐤃𐤏 *イエレフ*) という句は、出エジプト記の他の個所ではモーセやヤハウエなる神と結びついては用いられず、神の使い(御使い)について用いられるか、雲と火の柱(シヤカイナグローリ)としての神について用いられていると言います。(一四章一九節、二三章二三節、三二章三四節) これは確かにその通りでした。一四章一九節では神の御使いと同一視さえされています。つまり、現代聖書注解は、民が御使いの像を求めていることを示していると言っています。個人的にはこの解釈を支持して今後の説明に進んでいこうと思えます。そういうわけで、民が求めた『先だつて行く神々』は上記の一&二ということになります。ヤハウエなる神に御使いを象徴した偶像神を付け加えたということ。ちなみにこの『使い』(𐤂𐤏𐤃𐤏 マルハフ)

ですが、三章二節では燃える芝の中に現れ、イスラエルが葦の海を渡る際に共におられ、三二章三四節、続く三三章二節にも登場します。御使いが何者であるかは、以下四つの解釈が可能だと思えます。

- 一、神様の被造物である天使など
- 二、モーセ
- 三、第二位格であられる方
- 四、神ご自身の顕現

上記二、の候補は、ここでの意味としては真っ先に除外されるものだと思いますが、他三つの中でどれが最も適切な解釈なのかは判断が難しいところでした。ただし、御使いが何者を指していたであろうと結果として御使いを目に見えるものとしてかたち造り崇拜したことは、明らかな偶像崇拜であり、混合崇拜であったと思います。

二節で言及されている、民が身に付けていた金の耳輪については出エジプトの際に与えられたものだ

と思います。(二一章二節、一二章三五〜三六節)ただし、耳輪の他にも金製品があったと推察される中、どうしてここでは装飾品、中でも耳輪に限定したのかは不明です。一説では、偶像鑄造の条件が高価な個人所有物と引き換えとなれば民の気持ちが変わるかもしれない。とアロンが期待したのではないかと言います。アロンがどういふつもりで耳輪を求めたのかは別として、もつと興味深いことは、出エジプトの際に金その他の高価な装飾品などが民に与えられた目的についてです。以前、別の方が発表された幕屋建設に関する発表にもあったのですが、これらの高価な品物、特に金に関しては幕屋建設で用いられるべきものだったのでしようか(三〇章一六節)。だとすれば、民はそれらを神様に用いて頂くのではなく、偶像崇拜に用いてしまったのです。神様からの恵みを背信のために用いるとは、なんたることでしょうか。さぞかしサタンは喜んだものと思います…。しかしこのことは現代の私達に置き換えて考えてみることも可能です。私たちに日頃与えられている時

間、お金、知恵、権威、その他すべて、神様から与えられているものであるにも関わらず、時に気づかず、時に意図して悪のために用いてしまいます。それらのものを御心に適って用いられるよう、常に謙虚で、心を砕いて、神様を意識した生活をしていきたいと切に願います。

三節で使われている『みな』(יְכָל)は『全て』という意味ですが、民の一人残らずということではないと思います。なぜなら、レビ族など今回の偶像崇拜に加わらなかった者たちが居たはずだからです。ですからこの場合、『偶像を求めたものはみな』という意味ではないかと思えます。コルはこの後も二六節で使われますが、とりあえず みなⅡ多くの者と解釈することにします。

#### 偶像崇拜と祭儀 四〜六節

一節において、民は目に見える御使いの偶像を求めました。アロンはこれに答え、鑄型を造って鑄物の子牛を造りだしました。この後アロンは自分が造っ

たわけではないと、愚にもつかない言い訳(二四節)をすることになります。

私が四〜六節で気になった事柄は、民が偶像を指して『神々』(עֲלֻזִּים エロヒーム)と呼んでいることでした。また、アロンが『主への祭り』(עֲלֻזִּים アドナイ ハグ)だと宣言したこと

です。確かに民は一節で神々を求めたわけですが、アロンが造ったものは一体の偶像です。これを指して『神々』と複数形で呼ぶのは、やはり、ヤハウエなる神+御使いの偶像神=神々だからと考えることができます。また、偶像の製作者であるアロン自身は、それがただの物質的存在であることを知っていたにもかかわらず、(もしかしたら直接的には職人が作ったのかもしれませんが、指示を出したのはアロンであり、制作責任者であることは否めません。)『明日は主への祭り』と言うのもヤハウエを全く無視するつもりではなく、ヤハウエなる神に御使いの偶像神を付け足したという意識があったのではないかと推察するのです。それゆえ民は『エジプトの地から導き上つ

た神々』と言い、アロンは『明日は主への祭りである』と言ったのではないでしょうか。もちろんこれらのことは民とアロンを擁護し得る論理とはなりません。民とアロンは、これらのことを既に神から明示されており、(二〇章三〜四節)また、それに批准しているのです。

アロンは祭壇を築いて全焼のいけにえと交わりのいけにえ(和解のいけにえ)を捧げました。これはヤハウエに対して行われる儀式と同一だと思えます。ただ一点、『戯れた』(עֲלֻזִּים レツアハク)は性的な行為を暗示(創二六章八節)させるものですから、たとえ民とアロンがヤハウエとその御使いを崇拜するつもりであっても、その実は墮落してサタンに仕えたことが明らかです。ちなみに旧約聖書中の偶像礼拝には恐らく二通りあり、

一、 真実なる神様を崇拜することから墮落した

偶像礼拝

(一列王一二章二八〜三〇節)

二、外国の神を崇拜する偶像礼拝。(一列王一八章)

いずれの場合であっても、やはりその実はサタンを喜ばせ、神様を怒らせることに変わりないと思います。ちなみに金の子牛事件は上記二つの要素を兼備していることになります。

### モーセへの試練 七〇九節

二〇章一節で『わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導きだしたあなたの神、主である。』と言った神様が、ここではイスラエルのことを『モーセの民である』と表現しています。これには、ずいぶんと突き放した表現を感じられます。エジプト滞在の頃から何度となく『あなたの神、主である』(六章六節、一〇章二節、一五章二六節、一六章一二節、二九章四六節、三一章一三節)と神様からのメッセージを受けてきたにも関わらず、また、契約に批准したばかりなのに(二四章三節)、それでも民は偶像礼拝に走ってしまったわけです。うなじを固くする民(九節)

と言われるのも当然ですし、いよいよ突き放されても仕方ありません。しかしこれは、実のところ突き放してはなく、むしろ救いのきっかけを与えているのだということが続く一〇節以下から見えてきます。

### 回答 モーセとの対話を重視する神様 一〇一四節

神様は一〇節で民のことをご自身のお怒りに任せよう、また、その代わりにモーセを大いなる国民にすると述べられました。現代の私達も契約相手から裏切られたら契約を破棄するなり、もつと誠実な者と契約を結びなおそうと考えるとと思います。まして、それまでに何度となく裏切られてきているのであれば、いよいよ猶予なく実行します。しかしどうでしょう。神様は『今は、わたしに任せよ』と言っています。私はこの一句に『エジプトの地から連れ上ったあなたの民は』(七節)ほどの突き放した感情は感じません。なぜならば、本当に神様がイスラエルの民を絶ち滅ぼすことを決定しているのであれば、わざわざモーセに『わたしに任せよ』と伝える必要もなく即座に

決行されれば良いはずだからです。ですからこの箇所は、神様がご自身のなさることを独断で決定することよりも、モーセとの関わりの中で、あるいは対話の中で決定されようとしているのだと思います。また、このことは神様がモーセを仲保者として相応しい対応をするか試されているのだとも思います。神様に仕える真(まこと)の仲保者であれば、自身が大いなる国民となるよりも、民の救いと神様のご計画の遂行を求めるはずです。六〇万人を超えるイスラエルの民の運命は、このときモーセ一人に託されたように見えます。

さて、モーセは三つの角度から神様に嘆願しました。

### 一一節 神様の民であることを再強調する。

イスラエルの民はモーセによってではなく、あくまでも神様がご自身の御手によって力強く導き出したのです。イスラエルは紛れもなく選民です。神様がご自身がお選びになり、その手で引き出した民を絶ち

滅ぼすようでは、いったい何のための選民なのでしょう。これまで神様が行った導きに関する数々の奇跡は、ある意味で無駄になってしまいました。

### 一二節 神様の名声のために。

出エジプトの記のメインテーマの一つに、エジプトを含む諸国民がヤハウエなる神様こそ真の神であることを知るようになるために神様がイスラエルに働かれた。という点があると思います。そのイスラエルを神様が絶ち滅ぼすとなれば、諸国民がいったいどう思うでしょうか。

### 一三節 契約遂行を望む。(アブラハム契約の継続)

神様ご自身がアブラハム、イサク、ヤコブと交わした契約ですから、これを神様ご自身が破ってしまつては、契約を破ったイスラエルの民と同様の過ちとなつてしまいます。真であり義である神様がそんな決定をしないであろうとモーセは考えたのかもしれませんが。

これらは全てモーセ自身のためではなく、また、イスラエルのためでもなく、どこまでも神様を崇めることが主題となっているように思えます。こうしたモーセの訴えは神様の御心に適ったものだったので、神様はイスラエルを絶ち滅ぼすことを思いなおされました。ただしこれは、モーセが神様との議論に勝ったとか、モーセが神様の間違いを正したというわけでは、決してありません。神様はモーセが真の仲保者として相応しく対応するかを試しつつ彼を錬磨したのです。神様はモーセとの関係を重視しているのです。だからこそ神様は御自身で決定、実行するのではなく、わざわざモーセが嘆願してくるように余地を残したのだと思います。

神様はきつと、私達に対しても祈り求めることを願っていらっしやると思います。神様は私達一人ひとりととの関係を重視してください、わたしたちを錬磨してください、わたしたちが神様の御心に叶った祈りをするよう願っているのではないでしょうか。

ですから、『全ては神様の絶対的主権によって行われるものであり、私達人間の介入は一切許されない』ということはないと思います。そうであるならば、いたい何のための万人祭司なのでしょうか。祈り求めない祭司など私には到底考えられません。

#### ヨシユアの従順さ 一五〇一八節

さとしの板は、新改訳第三版では、あかしの板です。なお、あまり重要なことではないかもしれませんが、私はこれが両面記述式であることを見落としていました。てっきり二枚の板それぞれ表面に記述されていて、裏面には何も書かれていないものだと思っていたのでした。二枚の板のそれぞれ両面に記述があるとすれば、十戒の文面は少々独特なレイアウトだったのかもしれませんが、もしくは、同じ内容のものを二つ与えられたのかもしれませんが。一七節にヨシユアが突然出てくるような印象がありますが、二四章一三節に『モーセと従者ヨシユアは立ち上がり、モーセは神の山に登った。』とありますから、恐らくは山



の麓なり中腹なり、民ともモーセとも離れたところで、たった一人、四〇日間モーセの下山を待ち続けていたものと想像できます。だとすれば彼は、他のイスラエルの民とは対照的に極めて忠実な従者です。

### 義憤か性急か。 一九〇二節

モーセは神様から民の墮落を聞かされたときは怒りませんでした。しかし実際に民の行為を目にする  
と激しく怒ったのです。『怒りは燃え上がった』

(「**עָרַב**」 ヴアイハル アフ)とありますが、これは一〇節で神様が言った『わたしの怒りが彼らに向かつて燃え上がり』と同一です。

怒ったモーセは偶像を破壊して、それを水と合わせて民に飲ませます。これらのモーセの怒りと行動については概ね二通りの解釈があるようです。

- 一、神様と心ひとつにした義憤。神様の代理として行った。
- 二、状況を好転させようと色々とし性急な行動をとってしまった。

一、の解釈では、さとしの板を砕いたことは契約不履行を象徴し、偶像を破壊して民に飲ませたことは、神とした偶像を人の肉体を通して排泄させることで汚れたものとするためだった。あるいは、民数記の苦みの水と関連させて一種の試罪法であったのではないかと言います。(民五章一八〇二節)上記二の解釈では、神様から指示があったわけでもないのに、モーセが独自の判断で罰を執行していると言います。たしかにモーセは、自身と神様との間で取り交わされたことやその結果を民に説明する様子がありませんし、続く二七節でモーセが執った行動の大義名分『イスラエルの神、主はこう言われる』も聖書のどこ  
の個所を指しているのか不明です。

私はこの二つの解釈についてはどちらが正しいのかわかりませんが、恐らくは、両方の要素があったものと思います。しかしいずれの場合であっても、モーセが悪意なく、むしろ良かれと思ってとった行動ではないかと思えます。

## アダムとエヴァの子孫 二二―二四節

モーセはまず、アロンに対して責任を追究したのですが、アロンに問うた『この民はあなたに何をしたのですか』からは、今件について積極的に企画したのはアロンではなく、民から何かしらの脅迫があつて仕方なく行つたのではないかというニュアンスが感じられます。しかし、兄弟を信頼するモーセの純粋な想いはアロンの愚にもつかない言い訳によつて見事に裏切られます。アロンは、偶像が『火の中からひとりで出てきた』というのです。また、民が悪いのでこのことが起きたと責任転嫁さえしています。アダムとエヴァが知識の実を食べた時の言い訳を思い出します。アロンはこの点において、まさしくアダムとエヴァの子孫だったので。

## 敵とは何者か。 二五節

二〇節において既に偶像は破壊され、それを民に飲ませるといふ対処がとられています。もはや偶像は存在しないわけですが、それでもなお、民の乱れは

収まりません。一度偶像崇拜に心を奪われた民は收拾不能な状態に陥っていたのかもしれない。もはやアロンは民の前で無力です。こうした姿は敵の笑いものになりました。ここにある『敵』とは、残存していたアマレク人（一七章八―一六節）を指すとするのが一般的な理解のようですが、その背景にサタンを感じることは容易です。サタンは幕屋建設のため、つまり神様のために用いるはずだった金を分捕り、偶像崇拜、つまり自分のために使わせたのです。その結果、民は收拾のつかないほどに乱れ、リーダー代理は力を失つたのです。サタンはさぞ喜んだことでしょう。

## 民の代理、神の代理 二六―二九節

状況が一筋縄では解決できないほどであるとき、モーセは、宿営の入り口に立ちます。この『宿営の入り口』ですが、民全体に何かを布告する際に用いられる火の見櫓のようなところだったのかもしれない。拡声器もない時代にいったいどんな手段を使って六

○万人を遙に超える民へ布告したのかはわかりませんが、とにかくモーセは一大招集をかけました。『だれでも主につく者は私のところへ』とありますから、もはや偶像崇拜の過去よりも、これから先だれに従うのかを問うているように感じられます。

これに応答したのはレビ族(二章一〇節)でした。そこでモーセは、集まったレビ族に対し、主の名を用いて発令しました。『自分の兄弟、友、隣人を殺せ』この命令を字義通りに読むと、あたかも手当たり次第に殺戮せよ。と言っているようですが、おそらくは『偶像崇拜の首謀者、いまだ名残りのある者、乱れている者を見つけてだせ。見つけたら、それがどんなに親しい相手であっても殺せ。』という意味だと思えます。そうでなければ、レビ族が同族間で殺し合ったことになり、レビ族の中にも偶像崇拜をした者がいたということになります。実際にそのような説を唱える説教者もいるわけですが、いずれにせよ、レビ族は命令通りに行ったようです。殺された数が三千人というのは少ないような気がします、そもそ

も民全体の何割が偶像崇拜をしたのかわかりませんが、命令に従ったレビ族の人数も不明なのです。この数字についてはあまり注目せずに進みたいと思います。それよりも覚えておきたいのは、神様を頂点にした優先順位についてです。子は親に、親は子に、それぞれ逆らうことになる。イエス様は言いました。(ルカ一二章五三節) ヒューマニズム思想があらゆる分野に浸透している昨今ではありますが、私たちはクリスチャンが一番に忖度しなければいけないのは人類ではありません。私達クリスチャンは世に忖度するのではなく、神意を伺い、神意に沿って、常に優先順位の頂点を神様に設定して歩むべきだと思います。これを実践したレビ族は、祭司職につき、民の中で指導的立場に立つことになりました。

レビ族による三千人殺害の一件は、神様から命令を受けた行いではなく、直接的にはモーセが命じて行われたことです。しかしながら私は、モーセの判断と行動に仲保者としての本質を感じました。――

ある所に一組の親子が居ました。あるとき子ども

が食品スーパーで万引きをし、店は警察に通報、保護者に連絡をしました。連絡を受けた保護者は、子どもが保護されている警察署へ駆けつけると担当警察官に平身低頭、ただただ謝り続けました。万引きの被害を受けた店にも同じように対応しました。警察も店員も真摯に謝罪をする保護者の姿を見て大事にはしないことに決めました。保護者は警察署を出ると自分の子に厳しく、場合によっては手を上げる覚悟で叱りつけました。警察や店員から子どもを戒めるように求められてはいませんでした。保護者はそうしました。それはある意味、保護者として当然の役目だからです。

これは、相手によって顔色を変えるとか、二面性があるとか、決してそういうことではありません。この保護者は被害者の前で子の代理として、子の前では被害者の代理として、一貫して仲保者なのです。

同じように考えればモーセは民の前で神様の代理であり、神様の前では民の代理と言えます。しかもそれは、あたかも自分の子に対して責任を負う

親のようでもあるのです。血の繋がった実の子ども一人や二人であればまだしも、一説には一〇〇万人以上とも言われる強情で愚かな民と神様との間に置かれたモーセの重責たるや想像を絶するものがあります。それはきつと強い責任感だけでなく、類まれな謙虚さを持ち、神様と心をひとつにした彼だからこそできたのかもしれませんが、またそれは、モーセが真の仲保者であった所以です。

### 究極的な執り成し 三〇〇〜三二一

三千人殺害は直接的に神様から命令されたものではなくモーセの判断による行いだだったので、これによって民全体の罪が贖われることはありませんでした。実際、神様は三千人の命と引き換えに他の民全体を赦すとか、そういうことは一言も言っていないのです。三〇節のモーセの言葉は、三千人の死が民全体への赦しに直接的には影響しないことをモーセが理解していたからこそだと思えます。

モーセは再び山に登りました。しかし彼の足取りは

軽快ではなかったものと想像します。『いったいなんと言えれば良いのだろうか。どう祈れば良いのだろうか。神様は許して下さるであろうか。』一一節―一三で神様と心一つに御心に適った祈りをしたモーセではありましたが、今回ばかりはどう祈って良いものか分からなかったのかもしれない。そんなモーセの心の様子が三〇節『もしかすると…かもしれない』三二節『赦してくださいさるなら―』という表現から伺えるような気がします。また、三二節でモーセが言うところの『あなたがお書きになった書物』については、一、この世に生を受けた者すべてのリスト。  
二、御国に入る権利。永遠のいのち。(いのちの書)など、解釈が分かれるようです。  
たしかに旧約時代において、永遠のいのちに関する思想はなかったようです。ただ、それだからと言って二の解釈を完全否定するのは、やや性急ではないかと私は思います。例えばダニエル書一二章一―二節を見れば、ハッキリとその思想が記されており、少し意味合いが違ってくるかもしれませんが、死

後の世界という意味で考えてみれば、創世記三七章三五節でヤコブが『わが子のところ、よみに下つていきたい』と述べています。ですから、モーセが仮に新約聖書に出てくる『いのちの書(ピリピ四章三節、黙三章五節)』や『永遠のいのち(ヨハネ三章一六節、五章二四節)』という明確な概念を知らなかったとしても、その思想の芽が彼の理解の中にあつたと考えることは可能だと思ふのです。だとすれば、このモーセの執り成しは究極的です。現代でも人権活動家や世界平和を望む人はいますが、多くは思想止まりであつて実践的な例は少ないと思ひます。ましてや自己犠牲を伴うとなれば誰しもが少なからず躊躇をすることでしょう。ところがモーセは自身の肉体的死はおろか、まことの命すら犠牲にしようと言うのですから、謙虚を通り越して常軌を逸しているとすら思ひます。しかし私たちはここに、新約時代における二人の使徒の言葉を思い起こすことができます。ローマ書九章三節『もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き

離されて、のろわれた者となることさえ願っていたのです。』使徒の働き七章五九後半〜六〇節『主イエスよ、私の霊をお受けください。そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。』』

これら二つの言葉とモーセの執り成しは、その精神において類似しています。モーセやパウロ、あるいはステファノにおいても、およそ神様に仕える忠実な者の精神とは、こういうものなのかもしれません。

### 却下される究極的執り成し 三三〜三五節

神様は、ご自身の前に罪ある者は誰であれ書物から消し去ると言われました。つまり、モーセの究極的な執り成しは認められなかったということになります。多くの人のために一人の人が命を以って贖いをするという原理は、新約時代においてイエス様によって完全に成就するものであり、モーセのこの執り成しは、彼に与えられた役割と時代に適ったものでなかったのかもしれませんが、とは言え、モーセがイエ

ス様の雛型とされる一つの理由がここにあると思います。

イスラエルの民は絶滅を免れ（一四節）、引き続きカナンの地に向かうことが許可されました。しかし同時に罪の裁きを受けなければならぬことを告げられました。二三章以降、神様は民から離れ、民は悲しみの中に置かれながら旅を続けることになりました。三五節にある『民を打たれた』については、砕かれた偶像を呑んだことよって疫病になったという説、あるいはレビ族によつて三千人が殺されたことを指すとする解釈もあるようですが、後にカレブとヨシユアを除くこの世代全体が受ける罰（民一四章二六〜三八節）について言及しているのかもしれませんが。

## まとめ

三二章の内容から学ぶことは大変多かったと思います。中でも、人という生き物がいかに易々と墮落するかということは本章冒頭から明確に示されており、それは現代に生きる私たちにとっても他人事ではありません。わたしたちは、ともすれば目に見えるものに信頼を置いたり、耐え忍ぶことを忘れて自身の判断と行いに走りがちです。また、目に見える物質的何者(何物)かでなくとも、思想や概念が偶像化する可能性も大いに秘めていると言えます。合理主義思想(理神論)や一見平和的にとれるヒューマニズム思想ですら、それを神様より上の優先順位に据えるのであれば、思想的偶像崇拜を行っていることになるのだと思います。このことにおいては、現代に生きる私達こそ注意を払う必要があります。現代には、耳ありの良い思想が蔓延しているからです。

アロンは民衆の声に負けてしまいました。彼自身、それが間違ったことだとわかっていたであろうと推察しますが、圧倒的な民意と半ば脅迫めいた要請に

屈してしまったのかもしれない。指導者とは孤独なものです。ある時は民意に担がれますが、またある時は民意によって攻撃を受けます。しかし真の指導者であれば、たとえ民意が強くとも、決して大衆に迎合せず、一途に義の道を歩まなければなりません。この点においてアロンとモーセの違いは明確でした。モーセは民意に付度することなく、常に神意にそって民を導こうとしています。モーセは民の前で神様の代理として、また、神様の前では民の代理でした。その姿勢は、まるで責任ある親のようであり、また、極めて謙虚なものでした。

そんなモーセは、神様からの試練に万全な回答をしました。自らの栄誉を放棄して、まず神様のご計画の遂行を望んだ彼の祈りは、まさしく神様と心ひとつにした仲保者としての執り成しの祈りでした。神様はこの時、モーセを試練に合わせるだけでなく、モーセとの対話の中でイスラエルへの処遇を決めていこうとする思いがあったのだと感じられます。このことは、神様のご計画するビジョンに人の言動や行

動が一定程度関わってくることを示唆しているのではないでしょうか。もちろん私たちは重要な課題こそ神様にお委ねする必要があるわけですが、一方で、神様を信頼するからこそ祈り求めるということもあるわけです。神様が私たちとの対話や交わりを通じてご計画を遂行しようと願われているのであれば、私たちはヨシユアのように従順に、また真の仲保者モーセのように神様の権威とご計画を覚えつつ、大いに祈るべきではないでしょうか。

祈りとは、積極的な神様との交わりだと思いました。

#### 参考資料

- ・新聖書注解旧約一（西満著、いのちのことば社）
- ・ティンデル聖書注解（㊦・アラン・コール著、富井悠夫訳、いのちのことば社）
- ・現代聖書注解（㊧・㊨フレットハイム著、小友聡訳、日本基督教団出版局）
- ・旧約聖書略註（黒崎幸吉著、聖泉会）
- ・出エジプト記（尾山令仁著、羊群社）
- ・ヘブライ語聖書対訳出エジプト記Ⅱ（ミルトス・ヘブライ文化研究所）
- ・聖書新改訳二〇一七
- ・新共同訳聖書
- ・回復訳聖書（リビングストリームミニストリー）

#### 残された疑問

モーセ不在の間、アロンとフルがリーダー代理を務めたことになっている（二四章一四節）が、その後フルの記述が見当たらない。偶像礼拝の際、また、その後フルは何をしていたのだろうか。